

令和元年9月度 定例自然観察会報告書

六甲山自然案内人の会

- ・実施日：令和元年9月8日(日)
- ・天気：晴れ
- ・担当：6班
- ・テーマ：六甲山を背に芦屋川を浜辺へ
- ・参加人員：ビジター24名、会員23名、合計47名
- ・コース：阪神芦屋駅～芦屋川河川敷～芦屋浜～南芦屋浜(潮芦屋緑地)
- ・配布資料：ルートマップ、植生リスト(7月29日現在確認分)
- ・タイム：

9:30	集合、班分け、挨拶	9:40	4班に分かれ、順次出発
10:00	芦屋川河川敷で芦屋川に関する説明	11:30	潮風大橋下で昼食
12:20	潮風大橋下で芦屋浜に関する説明	13:50	潮芦屋緑地で解散

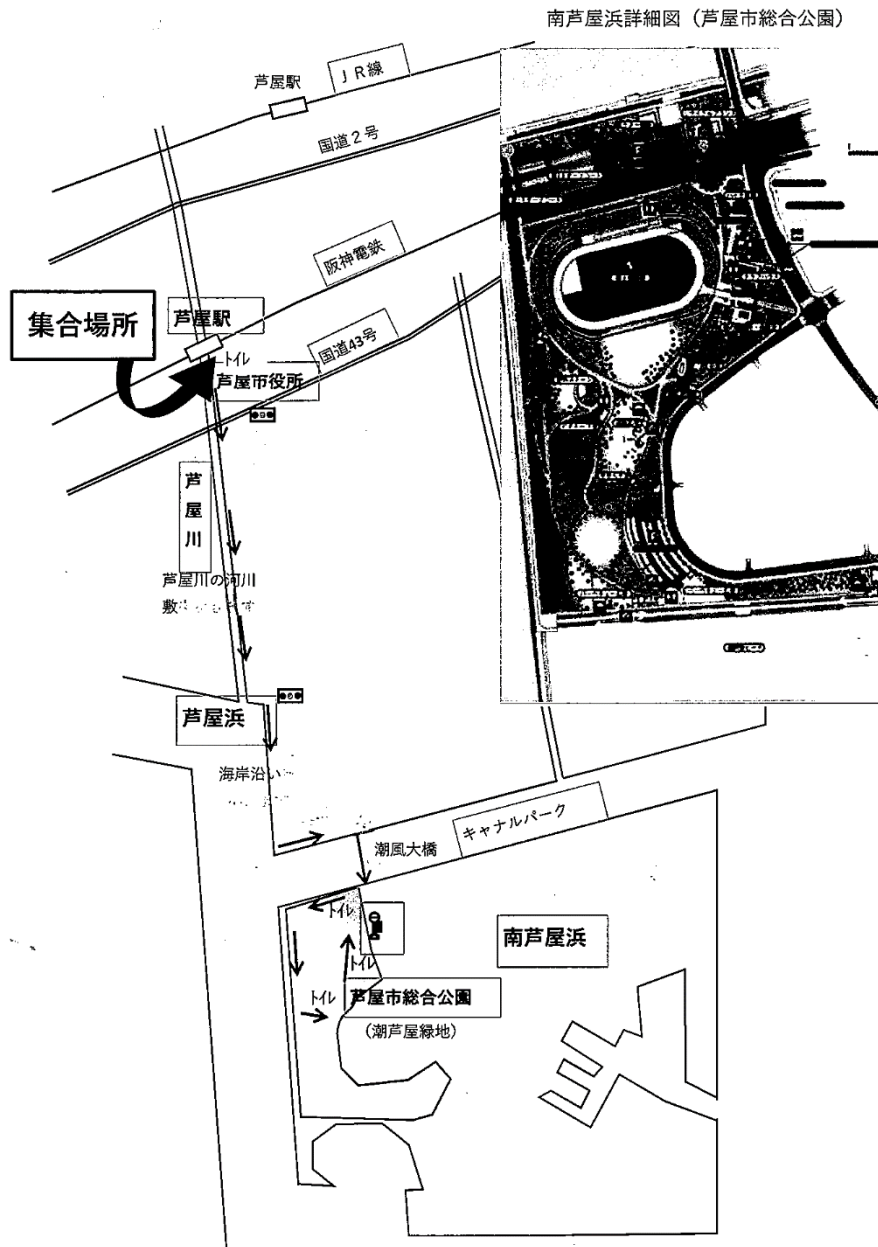


図1 自然観察会コースマップ

## 【概要】

今回は、六甲山を背にして、芦屋川の河川敷を歩き、南芦屋浜の埋め立て地まで歩くコースであり、これまであまり観察していない外来植物や海洋性の植物で出会えた観察会であった。

観察会当日は、前日からの台風 15 号の接近に伴い、猛暑を呼び込んだようであり、芦屋市内で熱中症が 4 件も発生する暑さが厳しい中での観察となった。

芦屋川は、六甲山の最高峰に近い石の宝殿付近を源流(写真 1)として、標高差 800m を 8 km で下る平均勾配 10% とかなりの急流の河川となっている。芦屋川は典型的な天井川であり、鉄道や道路が川の下を通っている。

### 1. 阪神芦屋駅～芦屋浜

今回のルートである下流流水部の多くはツルヨシ(写真 2)が繁茂している。ツルヨシはイネ科ヨシ属の植物であり、ヨシに姿が非常によく似ているが、はっきりした違いは、匍匐茎が地下でなく地表を這うことである。ツルヨシは水質浄化の働きもあつてか、川の水の透明度は高い。



写真 1 源流方向を望む



写真 2 芦屋川のツルヨシ

芦屋川の河川敷では、普段はあまり気に留めない外来植物が多数生育している。最初に見たのはカラムシ(写真 3)である。カラムシは、古くから植物繊維をとるために栽培されてきた。

外来種の典型はシロツメグサ(写真 4)であり、漢字表記の詰め草の名称は 1846 年にオランダから献上されたガラス製品の包装に緩衝材として詰められていたことに由来するという。



写真 3 カラムシ



写真 4 シロツメグサ

厳しい日差しの中、鶴塚（ぬえつか）橋(写真 5)の下でつかの間休息する。鶴は、頭はサル、体はタヌキ、手足はトラ、尾はヘビという奇妙な化鳥であり、大凡 800 年間前、京都からその死骸が、遠く大坂湾へ流され芦屋の浜辺に漂着したことに由来するという。橋の下という過酷な環境の中でもヨツバハコベが育っている様子を観察する。

芦屋川の川面には、ハクセキレイが飛び交うとともに、サギやカルガモ(写真 6)が餌をついばむ姿が散見される。



写真 5 鶴塚橋の下でのヨツバハコベの観察



写真 6 カルガモ

この他、スタート地点から、芦屋浜までの区間で、外来生物法によって要注意外来生物に指定されているシナダレスズメガヤ(ウィーピング・ラブグラス)をはじめ、オオキニシキソウ、コニキソウ、ユウゲショウ、カラクサシュンギクなどの植物を観察する。

## 2. 芦屋浜(芦屋川河口)

芦屋浜からは、これまでの区間とは様相ががらり変わり、コンクリートの護岸上を歩く。しかし、芦屋浜は六甲山から流れでた白い砂浜とクロマツが植わる白砂青松の地である。ここでは、ボート(写真 7)を練習する姿やモーターボートで会場を走る姿も見られる。

この区間で少ないが、センダン、ヌスビトハギ、シャリンバイなどを観察する。

潮風大橋を南芦屋浜の下で昼食をとる。この日、たまたま第 9 回潮芦屋アクアスロン大会が行われており、外周堤防上を走るランナー(写真 8)を見守る。



写真 7 芦屋浜のボート

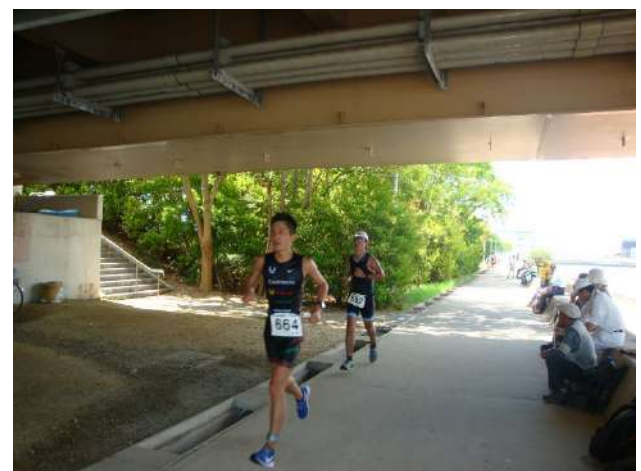


写真 8 外周堤防上を走るランナー

### 3. 南芦屋浜(潮芦屋緑地)

昼食場所から南芦屋浜のコースは、アクアスロンの競技に支障を与えないよう、最初のルートは一部を変更する。南芦屋浜は、昭和44年に埋立てに着手し、昭和50年に完成した造成地であり、ここには潮芦屋緑地と呼ばれる広い公園緑地が整備され、様々な植物が植栽されている。

緑地園路には、7月に黄色の花を咲かせるハマボウ(写真9)、さらにその近くには葉っぱの周りが茶色に枯れたトチノキ(写真10)を観察する。前者は、元々内湾海岸に自生する塩生植物であるものの、後者は内陸部の落葉性の高木であり、ミスマッチな植栽と思われる。



写真9 ハマボウの花



写真10 トチノキの葉っぱ

この園路沿いには、葉がビワに似ていることから名づけられたハマビワ(写真11)、どんぐりが長楕円形であり、2年かけて熟すマテバシイ(写真12)、また備長炭の原料となるウバメガシ、春には黄色の花をさせるサンシュユなどを観察する。



写真11 ハマビワ



写真12 マテバシイの葉っぱ

途中、一度生えると完全に駆除するのは難しいとされるワルナスビが、牧野富太郎により発見及び命名された逸話などを紹介するとともに、六甲山では観ることができない海岸性の植物や温暖気候に育つ植物を観察する。

さらに、水生生物の観察のために作られたビオトープでショウブ、ヒメガマ、スイレンを観察した後、芦屋市総合公園前のバス停付近で解散する。

報告者 藤井 雅雄